

# 1000対1の去勢リンチ

朝起きたら若い女が

皆キ〇タマを潰しに来る世界になっていた！

千人の女が一人の男に襲い掛かり何度も玉を潰す！



玉子王子 著

## 1章 世界改変とキ〇タマ潰し

闇の中に、一人の男が浮いていた。

「君の願い、叶えてあげるよ」

急に男の前に現れるのは、銀色に近い長い髪の少女。

かなり小さい目である。

「俺の願い？」

「世界改変」

なんだかわからない。

土江は首を捻る。

土江はただのサラリーマン。

同人ダウンロードサイトなど利用しているので結構オタクよりの人間だと考えている。

願いはあるにはある。

朝起きたら急に、周り中の女が自分に惚れて好きにやらせてくれる世界になっていたらいいのに、というようなものだ。

——ん、それって世界改変っていうのか？

だとすれば、目の前の少女は。

まあ、夢だろうが。

「どうせなら巨乳〇子高生が出てくりゃいいのに、何でロリなんだよ……」

「それじゃ、このクジ」

まったく取り合わず、ティッシュの箱を差し出してくる少女。

「これを私が引くから、出たクジの内容の世界に改変される。ただし一日」

「君が引くのかよ……」

変な話だが、まあ夢だと気にしない。

「それじゃ、引きまーす」

ごそごと箱の中を探る少女。

手が端の方に行く。

ガリガリと側面の壁を爪で擦るような音。

「はいこれ！」

「なんだ、今のガリガリは？」

と、少女がティッシュの箱を破いて中のクジを撒き散らす。

「なんで？」

「景気付けだよ」

首をかしげる土江。

——あの爪の音は……もしかしたら側面の隙間に引きたいクジをあらかじめ仕込んでいて、証拠隠滅で今破いたのか？

「えー、手に汗握るティッシュクジの結果」

——なんかそういう漫画読んだことあるような……。

「土江工太さんの世界は、次のように改変されます」

「土江工太さんの世界は、次のように改変されます」  
少女が手を挙げると、何もない所に文字が浮かぶ。

朝起きたら、若い女全員が  
俺の辜丸を潰しに来る世界になっていた！



少女が手を挙げると、何もない所に文字が浮かぶ。

**朝起きたら、若い女全員が俺の辜丸を潰しに来る世界になっていた！**

「まるでラノベだね！ よくある設定だと思うよ！」

「ねーよ！」

土江の心からの叫び。

あったらいいと思うが、残念ながら聞いた事が無い。

歯を見せる少女。

「いや、こんなクジが出ちゃうなんて。妖精である私でも、この結果は読めはしなかったね」

「わけわからねえよ。っていうか、そんなことしたらその女も捕まるだろ？」

「そこは世界改変の一部で、君へのキ〇タマ潰しのための行動は咎められない、止められない形になるんだよ。当然でしょ？」

「当然なのかよ……」

夢にしても無茶だ。

「朝起きてから、夜十二時まで、君の近くに来た若い女性は君のキ〇タマを潰そうとするよ！ 一回潰したら終わりだけだね」

玉が潰れてもナノテクノロジーで治る。

ナノマシン入りの薬を飲めばそれで治療が行われる。

ただ、十時間ぐらいはかかるはずだ。

それなら、一度潰されたらその改変とやらは終わりとなる。

治療してる間に一日が済んでしまう。

軍用のナノ薬が開発されているというのが、その辺に出回ってはいないだろう。

——兎岳の刑務所のドキュメンタリーに出てきたな、新薬。脱走して捕まった奴に飲ませて連続何回のキ〇タマ潰しをやってた。……って、そんな話よくドキュメンタリーにして外に流すよな。あれ、なんていうタイトルだったかな……

土江が考えているのは、

レ〇プ犯鳥居が収容されたのは性犯罪被害女性だけが看守を勤める民営刑務所だった。更生プログラムという名の金責め生活が始まる！

というドキュメンタリーのことである。

新薬は痛みを止める効果が無いのであまりよくないと考えられたか、あるいは忘れていたのか、ほかで使われた話は聞かない。

手を叩く少女。

「あ、そうそう、この一日の間は、新型の即効性高い薬を都合よく若い女性が持ってるから、女性の数だけ去勢可能だよ」

「可能だよってなんだよ……」

酷い夢だ。

思っているうちに、眠くなってくる。

「それじゃ、気をつけて。人が、というか若い女性が一杯いる所に行ったら、大変な事になると思うから」

少女の声が遠くなっていく。

「〇子高なんかにはいっちゃったら、寄ってたかって去勢リンチだよ」

ギュ、と股間が引き締まる。

あくびをしながら家を出る土江。

妙な夢を見た気がするが、思い出せない。

「なんだったかな……」

変な内容で、頭に残らなかった。

いや、残ってはいる。

だが、引き出せない。

住宅地を歩く。

「土江さんおはようございます」

「ああ、おはよう」

近所の○子高生。

土江は三〇歳で、ずっと今の家に住んでいる。

その子が生まれたときすでに土江は中学だった。

よく赤ん坊の彼女を抱っこしたものだ。

と、少女が走り寄ってくる。

「土江さん！」

「んー、おぐっ！」

目の奥で火花が散る。

膝。

ほっそりとした膝が、生まれたときから知っている少女のスカートのなかから突き上げられ、土江の股間に減り込んでいた。

当然肉玉がゴリッと音を立てて押し潰される。

「ほんぐうう」

「やだっ！　ほんぐうなんて！　そんなにキ〇タマ痛いですか？」

「ま、マリナちゃん、何を……」

少女、片末マリナは足を下ろさず、グリグリと膝で肉玉を追い回す。

はっとするような美少女だ。

将来が楽しみだとずっと思ってきた。

それが突如、理由もなく急所を蹴り上げてきた。

——ど、どういうことだっばよ！？

汗が噴き出す。

何かしたのだろうか。

そんな覚えはまるで無いが。

いや、何かしたにしてもいきなり金蹴りは酷くないか。

大体、マリナは別に怒った様子も何も無い、金蹴り以外は普段通りだ。

「ちょっとこっちに来て下さい！」

股間を押さえてほとんど身動き取れない土江を引っ張り、路地裏に引き込む。

「あ、そのゴミ箱に座ってくれますか？」

押して、無理矢理座らせる。

座っただけで肉玉に響く。

汗がさらに浮き出す。

——ぐぐう、キ○タマ……キ○タマ蹴られたことは何度もあるけど、○校生の……ほとんど大人の力で思い切りは初めてだ……し、死ぬ……

涙が出そうになるが、必死で抑える。

マリナの前だし、大人の男として泣きたくない。

「な、何でキ○タマ……あ」

マリナの手が、土江の手に重なる。

いや、下に滑り込む。カチャカチャとベルトの音が鳴る。

いや、下に滑り込む。  
カチャカチャとベルトの音が鳴る。

「ズボン脱がせますね。わっ！  
相変わらず

**おチンチ○大きい！」**

ズボンとパンツを下げられると、異様とさえいえるほど  
巨大な土江の一物があらわになる。  
萎えていても余裕で

**二十センチの大台を超えている**

のだからほとんど冗談のような大きさだ。

それをまじまじと見て、頷くマリナ。

「ズボン脱がせますね。わっ！ 相変わらずおチンチ○大きい！」

ズボンとパンツを下げられると、異様とさえいえるほど巨大な土江の一物があらわになる。

萎えていても余裕で二十センチの大台を超えているのだからほとんど冗談のような大きさだ。

それをまじまじと見て、頷くマリナ。

「男の人を知ると、これがどのぐらいなのかよく分かるようになりましたよ」

昔からの付き合いなので、自分のを見せたこともある。

いや、見せたというと語弊がある。

見られてしまった、というべきだろう。

別に、妙な趣味があるわけではない。立ちションなど平気な普通の男であるから、子供に見られることはあるのだ。

「うふ、今付き合ってる人も大きいけど、土江さんのはさらに上ですね」

「つ、付き合ってるんだ」

それはそうだろう、美少女でもう〇校生だ、フリーな方が不思議。

「うふ、誰なのかはいえないんです。担任の先生だなんていったら先生の立場がまずいでしょ？」

——言ってるじゃん……っていうか教え子のこんな美少女と付き合うとか……上手くやりやがって。糞ヤリチンが……

心の声が聞こえたら、マリナはそれは違うというだろう。

むしろまったくモテない方だと。

と、手を伸ばしてくるマリナ。

巨竿を太股に乗せてよけておき、肉玉の根元に指を入れ、両手で片玉ずつ握りこんでいく。

金握り。

簡単に言うが、恋人でもない〇子高生が大人の男の睾丸を握るなど普通では考えられないだろう。

「え？ ちょ……」

脱がされるだけなら、まだ「エロ展開かも」という期待もなくはなかった。

だが、絶対急所を握りこまれては、恐怖が一瞬で噴き出す。

マリナは結構手を伸ばし、玉を握ってくるので押し返そうにもあまり強く押せない。

それでも手首を掴むことは出来た。

細い、力など無いといえる華奢な女の手。

それでも、強烈な金的の後では引きはがずのは難しかった。

大体、玉を握ったままの他人の手を引き千切るように離すなど無理だ。

チラ、と整った顔を見る。

目線に気づいて微笑むマリナ。

「大丈夫です！ 安心してください！」

「いや、とりあえず落ち着こう」

立とうとするが、先ほどの金蹴りのダメージで力が抜けていた。

その割りに、肉玉がまったく縮んでいないのに気づく。

——なんだ？ なんで縮まない？」

縮んでいれば、あっさり握りこまれることもなかったはずだ。

と、マリナの手に力が入ってくる。

「あ、ちょ……おおおおおっ！」

「あ、ちょ……おおおおっ！」

「キ〇タマ潰しキ〇タマ潰し、  
うふふ、そういえば昔はお兄ちゃんって呼んでましたよね？

お兄ちゃんの **キ〇タマ潰して去勢して、**

明日からお姉ちゃんに……」

「や、やめて……」

「右の金色のキャンディーを潰すと女の子に変身。  
左の金色のキャンディーを潰すと女の子に変身」

「意味不明……おおおおっ！」

ギュウウウウウウウウ、細く、力も無い綺麗な手。  
しかし、睾丸に圧力を加えるなら、その少女の力でも十分致命的だ。  
緩々のを、片玉ずつ握られればなおさらだ。

「キ〇タマ潰しキ〇タマ潰し、うふふ、そういえば昔はお兄ちゃんって呼んでましたよね？ お兄ちゃんキ〇タマ潰して去勢して、明日からお姉ちゃんに……」

「や、やめて……」

「右の金色のキャンディーを潰すと女の子に変身。左の金色のキャンディーを潰すと女の子に変身」

「意味不明……おおおおっ！」

ギュウウウウウウウウ、細く、力も無い綺麗な手。

しかし、睾丸に圧力を加えるなら、その少女の力でも十分致命的だ。

緩々のを、片玉ずつ握られればなおさらだ。

——な、なんでこんな、縮まない！？ 握られる！？ 意味わからねえ……わからねえ……で、でも、大丈夫だって言ってたから、潰すところまではいかないつもりなんだ……

視線を向ける。

気づいたマリナが微笑む。

ぼ、となぜか顔を赤らめる。

「大丈夫ですよ土江さん、私、この前駅で試供品を貰ったんです。ナノテク治療薬の新しい奴。渡してくれた女性がここだけの話って言ってたんですけど……睾丸ぐらいなら十秒で治るんですって。だから去勢っていっても一瞬だけですよ！」



「それは「大丈夫」なのか!？」

一物が音を立てるように縮む。

「あ、おチンチ〇小さくなってきました! 元が大きいから、しゅっと凄いい勢いで縮んだみたいに見えましたよ! 縮んでも、前の彼氏より何倍も大きいですけど。十倍ぐらい?」

——どんだけ前の彼氏ディスるんだよ!？」

まさか本当にそのぐらいのサイズだなどとは思ってもよらない土江。

まあ、本当でも口に出すのはやはり悪口だろうが。

話しつつも、一定の圧を加えつづけているマリナ。

汗が浮いてくる土江。

玉が潰れても治らない時代なら、殴って突き放すだろう。

だが今は、治るのだ。

生まれたときから知っている少女を殴ってまで止める気にはならなかった。

それは、まだ土江が玉潰しの痛みを実際には知らなかったからかもしれない。

唾を飛ばし、目を見開くマリナ。



「そろそろいっちゃえ! キ〇タマ潰れろ! キ〇タマ潰れろ! そらああああ! 体重かけちゃい

ますよ！ 軽いから変わらない気もしますけどね！」

「ちょ、そんな体重かけないで……あ、ぎゃあああああああああああつ！」

ブチュ、という嫌な音が耳に入り、手の中の鶏卵程とはいわないが、相当大き目の玉が形を失うとマリナは目を輝かせる。

「あっ！ キ〇タマ潰れた！ お兄ちゃんありがとう！」

白目を剥いて泡を吹く土江。

ぐったりと力を抜くが、ゴミ箱の上に座ったままだ。

一物の先から血が流れ出す。

飛び上がって手を叩くマリナ。

「うわっ！ 何かわからないけど、凄く幸せな気分！ 土江さんを去勢できてよかった！ あ、これ、薬です。それじゃ私は、学校あるから」

言って、踵を返す。

薬を飲んで数秒後、縮んでなお巨根の内にはいる一物の下、空だった袋の中に重苦しい玉が再生される。

が、痛みはなくなる。

気絶したまま、下半身丸出して路地裏のゴミ箱に座っている土江。

と、その頬が叩かれる。

三人ほどの、主婦らしい女が半円形に土江とゴミ箱を囲んでいた。

「ちょっと、お兄さん大丈夫？」

「う、あ」

体のダメージはないのだ、ただ、痛みを感じているだけ。

意識が戻ると、肉玉から痛みが一気に伝わってくる。

「うぐうううっ！ な、なんでマリナちゃん……」

涙が出る。

裏切られた悲しみとかではなく、ただ肉玉が痛いから。

潰れたときに感じた痛みは、まだ感覚として残像のように残っている。

彼の肉玉は潰され、神経がミンチのように均されて全体的に刺激される形になった。

それは気絶してしばらくして、かなり治まっているはずなのに意識が飛びそうなほどの痛みだった。

股間を抑える土江の肩を叩く女。

三人。主婦らしい。

「なんだかわからないけど、大変だったわね」

「え、ええ」

「それにしても……あなた大きいおチンチ〇してるわねえ」

頬を緩める熟女。

「やだ、そんな本当のこという？」

「だってこんな立派なのよ？」

「やだ、フグリ玉も巨大」

「本当ね、それじゃ」

当たり前のように肩を叩く。

「睾丸、潰させてもらおうかしら」

「え」

熟女、と言っても、一番若い者は二十七ぐらいなのだ。

それは、彼女らを「熟女だな」と見ている土江より年下である。

それでも主婦で子供も歩き出す年齢だと、AV界限では熟女となる。

二十五歳からという話だ。

一番年上でも三十そこら。

ようは、熟女と言ってもまだ「若い女性」にはいるものたちなのだ。

「え、ちょ、まって……」

「立たせて」

「はいはい」

二人の熟女が腕を持ち、引き上げる。

先ほど肉玉を潰されて、まだ痛みも残っている。

抵抗など出来ないが、それでも体を捻る。

「ま、まってくれ、なんで……」

叫びつつ、急に思い出す。

夢を。

——わ、若い女が皆、俺のキ〇タマを潰しに来る！？ マジ？ マジ！？ そんな「世界改変」いらねえ！ っていうか、「世界改変」とかあるのかよ？！ でも、アレがただの夢だったら、これはなんだ？

説明がつかない。

マリナが急に肉玉を潰しに来たり、面識も無い落ち着いた大人といった感じの熟女三人が今、土江を拘束して肉玉を潰そうとしている。

世界が変えられたという無茶な説明以外、現状を解釈する理屈は存在しない。

そう土江には思えた。

しかしそんなことより、とにかく肉玉を守る方が先決だった。

「ま、まって……おぐっ！」

「膝蹴り！ 膝蹴り！ キ〇タマ膝蹴り！」

「もっと蹴り上げて！ ゴリッとキ〇タマ潰すのよ！」

「あれ、何で潰すんだっけ？ まあいいか、やっちゃえ！」

「育児押し付けやがって！」

「ちょ、野村さん！」

「主婦は楽でいいな、ですって？ キ〇タマ潰す！」

「溜まってるのね野村さん……」

野村麗美、三十歳主婦。

子供二人で上辺は幸せそうだが、腹の中にはいろいろあるようだ。

人間、皆そうだろうが。

「このデカチ○ポ！ キ○タマ潰してやる！ 去勢だよ！」

「ぬぐううっ！」

急所が痛くて動けないなどとは言ってもらえない。

ゴスゴスと容赦なく叩きつけられる膝蹴りから何とか逃げようと必死で抗う。

膝を締め、金蹴りのダメージを最小にしつつなので、全力で暴れるのも難しかった。

女とはいえ二人がかりで腕を捕まれているのは中々動けない。

それでも、やはり男女差は大きい、振り払う。

塀の上にマリナがかけたままのズボンとパンツを掴み、走る。

路地裏を抜けようとする。

と、前に人。

「遅いわよ野村さん。ん、あら、大きい」

同じような主婦。

五人ほどいた。

それが、ブラブラ揺れる土江の巨棒を見て一様に巨大さを口にする。

足を止める土江。後ろから、同じような主婦三人が追ってくる。

「よかった！ その人去勢するから捕まえて！」

「わかったわ！ っていうか、私も去勢したい！」

今、したくなった。

それはつまり、すべての若い女性が一律で「土江を去勢せよ」と何者かに刷り込まれているわけではないということだ。

ある程度近付けば、目覚める感じではないか。

そのありようは、ゲームをよくやる土江にはわかりやすい形だった。

ある程度近付いたらランダムに動いていたモンスターがプレイヤーに気づいて寄ってくるのと同じというわけだ。

まあそんなこと言ってもらえる余裕はないが。

「は、はなせっ！ おぐっ！」

「大人しくしなさい！」

しがみついてくる主婦たち。手の空いた者が股間に拳を叩き込む。

「キ○タマ潰して！ 潰して！ 軽く叩くだけで十分よ！」

「はぐあっ！」

ゴチャ、ゴチャ、と音が鳴るほど拳を叩き込む主婦たち。

玉がついていないだけに、いざとなれば女たちは男の急所を狙うのに何の容赦も無い。

メキ、と拳が減り込むたびに、上の一物が激しく左右に振られる。

時々一物ごと肉玉が打たれるが、それだと目に見えてダメージが少ない。

それに目を向け、目を輝かせる主婦もいた。

「チンチ○ブルンブルン揺れてる！ 超巨根ねえ！ 引っ張ってどけないと、去勢の邪魔になっちゃうわ」

「はうっ、に、握らないで……おぐうう！」

「チ○ポでかけりゃえらいと思ってんの？　うちの旦那はどうせ小さいわよ！」

ギュウウウウウウウ、と肉玉を握り締めるのは、旦那がつけるゴムがSサイズだったことで喧嘩になったことがある主婦だった。

かってに買ってきたMサイズのが緩く、すぐ外れてしまったのだ。

それで急に夫が不機嫌になったが、普段のがSサイズだと知らなかった彼女は当初わけがわからなかった。

その揉め事でしばらくセックスレスになったりと大変だった。

だから巨根が気に食わない、というのは無茶な論理展開ではある。

「いいわよ！　金ちゃん握り潰しちゃえ！　二個ともよ、左右のキ○タマ二個とも潰すのよ！」

「うふふ、こういうのなんていうのかしら。集団リンチ？」

「違うわよ、**集団去勢リンチ**よ！」

「いいわよ！　金ちゃん握り潰しちゃえ！　二個ともよ、  
**左右のキ○タマ二個とも潰すのよ！」**

「うふふ、こういうのなんていうのかしら。集団リンチ？」

「違うわよ、**集団去勢リンチ**よ！」

それ以上に恐ろしい言葉があるだろうかと、  
大勢の女たちに押さえ込まれながら  
他人事のように考える土江。

それ以上に恐ろしい言葉があるだろうかと、大勢の女たちに押さえ込まれながら他人事のように考える土江。

その間にも去勢リンチは続く。

「どうせデッカイチンチ○で女の子泣かせてるんでしょ！　女の敵、去勢しちゃえ！」

「ち、ちがう……おおおっ！」

セックスの九割以上は風俗という散々なモテ具合の土江である。

一様恋人が出来たこともあったが、続かなかったのは一度も出来たことがないよりまずいかもれない。

付き合えるポジションにはいるのにまるで認めてもらえないのだから。

が、説明する前に、マリナよりはるかに力のある主婦の手の中で命が砕ける。

「おおおおおおおおおっ！」

「あ、キ○タマ潰れた！ グチャグチャよ！」

「威張ってても男なんてこんなもんよね。寄ってたかって押さえ込めば、女にだってなすすべなく睾丸潰されて去勢されるのよね」

「ふう、なんか凄くいい気分。去勢してよかった！」

「うらやましいわ、さあ、薬飲んで」

「あと七人、延べ十四個キ○タマ潰しよ」

意識が無い土江に薬を飲ませ、玉が治るやすぐに頬を叩いて目を覚まさせる。

「う、も、もうやめてくれ……」

と、道路に座らされる。

左右から足を引っ張る。

靴を脱ぐ主婦。

「あらあ、キ○タマ全然縮んでないわ」

不思議な話だ。

土江の肉玉は緩々で、竿同様大き目であることもあって道路についている。

竿が巨大すぎて邪魔なので、別の主婦が搦んで後ろに引っ張る。

双子の山のように、道路の上に転がる肉玉。

その付け根辺りに足を乗せ、外に向かって押し始める主婦。

「あ、ま」

「キ○タマ踏み潰し！」

「ぎゃあああああああ！ やめてやめて……」

体重を一気にかける。

普通ならすぐ縮み上がるはずだが、なぜか縮まない土江の肉玉。

実はそれも、この世界の改変された部分の一つだった。

彼の肉玉は何があるかと縮み上がらないのだ、今日の十二時までは。

それはもちろん、女たちが肉玉を潰し易いようにである。

もし普通どおり縮むなら、今のように踏み潰しなど形状として不可能だっただろう。

ついでに言えば、去勢は素手か素足でするように女たちも調整されている。

わざわざ靴を脱いだ理由もその世界改変によるのだ。

でなければ靴でやった方が早く潰せるに決まっている。

「おらおらおら！ キ○タマ踏みにじりよ！ あはは！ なっさけない！ キ○タマツルツル、袋のなかで逃げ回ってるのがわかるわ！ それでも男？ 勝負しなさい！」

「チ○ポこんなにでっかいのに腰抜け？ どうしようもないわね！ ほら、デカチ○ポしっかりしなさい！」

握って引っ張る主婦。

「あはっ！ 目茶目茶伸びるわ！ 一メートルぐらいになってない？」

「そこまでいかないでしょ！」

「や、やめっ」

一物のほうには、さほどの力を加えない主婦たち。

あくまでも、狙いは肉玉一択だった。

「お、ごおおおおおおおおおっ！」

仰け反り、唾を吹きだしてガクンと動きをやめる土江。

踏んでいた主婦が足をあげる。

「キ○タマ潰しました！ このデカチンくん、今日から女の子です！」

「ようこそ女の世界へ。女に去勢される気分はどう？」

「早く薬、次は私よ」

「ほら、玉治ったんだから起きる」

「も、もう許してくれ……」

「許す？」

言われて、主婦たちが首をかしげる。

別に怒ってやっているわけではない。

理由は、彼女たちにもよく分からなかった。

**世界がそうになっているのだ、それも今日一日だけ。**

そんな事は、その世界の中の人間にわかる話ではない。

主婦たちによる去勢リンチはさらに続いた。

「キ○タマ潰れろっ！」

「おぐっ！」

そして最後の一人が四つんばいにさせた土江の垂れ下がった肉玉をサッカーボールキックで粉碎して去勢すると、急に土江への関心を失った。

今日の夕食の話をしたり、夫への不満など口にしつつ、機械的にナノ薬を口に押し込んだ土江をぼろくずのように転がして去っていく。

その場にしばらく若い娘が来なかったのは幸運だっただろう。

何とか目を覚ますと、度重なる肉玉潰しの痛みを改めて感じて、再び気絶しかける。

だが、何とかこらえてズボンを履いた。

体は、無事なのだ。

何とか吐き気と眩暈をこらえつつズボンをはいてその場を後にする。

とにかく、会社に行かねばならない。

馬鹿げたことだ。

会社に行くまでに、若い女何千何万人とすれ違うことか。

そんなところに突っ込んでいくなど、どれだけキ○タマ潰しが好きなのだと言う話である。

いくら何度でも玉が治るとはいえ、それは普通の人間なら「最悪玉が潰れても治るのか、まあ安心だ」と思うものだ。

何度潰れても再生するなら「何度でも玉を潰されることが出来る」などというのは常人のなしえる発想ではない。

もちろん、並のキ〇タママゾですらないただの一般人の土江はそんなこと考えてもいないのだ。

ただ、普段の行動パターンどおり、会社に行こうとしているだけである。

それが「地獄へ行こうとしている」のだと彼が気づくのに、更なる犠牲が必要だった。

体験版終わり

この後土江は更なる去勢リンチにさらされ、

最後には千人という軍隊級の数の女性の集団に囲まれ、数の暴力で去勢されまくる事になります。

よろしければ、続きは製品版でお楽しみください。